

令和6(2024)年度 病害虫発生予報 第4号

令和6(2024)年7月19日
栃木県農業総合研究センター
環境技術指導部

高温で病害虫の発生が早まるおそれがあるので早期発見・防除に努めましょう。

予想期間 7月下旬～8月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 水稻 いもち病

- (1) 発生予想 ・ 発生量：やや少ない
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は平年並（ほ場率：平年比 103%、株率：平年比 43%）(±)
・ 向こう 1 か月の気温は高く (-)、降水量はほぼ平年並 (±)、日照時間はほぼ平年並 (±)。
・ BLASTAM（7月中旬）では、一部の地域で感染好適条件及び準感染好適条件が連続してみられている(+)。
- (3) 対 策 ・ ほ場の発生状況を良く観察し、発病が見られた場合、早急にトライフロアブル（RAC コード F:U16）等の予防・治療効果のある薬剤を散布する。
- (4) 備 考 ・ BLASTAM(いもち病発生時期予測システム)の情報、薬剤感受性検定結果、令和6(2024)年度植物防疫ニュースNo.10を当センターHPに掲載中。

2 水稻 斑点米カメムシ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ 7月上旬中の雑草地等すくい取り調査での発生量はやや多い（成幼虫数 ほ場率：平年比 100%、頭数：182%）(+)。
・ 7月中旬の水田すくい取り調査での発生量は平年並（成幼虫数 ほ場率：平年比 106%、頭数：67%）(±)。
・ 向こう 1 か月の気温は高く (+)、降水量はほぼ平年並 (±)。
- (3) 対 策 ・ 穂ぞろい期に斑点米カメムシ類が水田内で見られる場合は、乳熟初期（出穂期 7～10 日後）までにエクシードフロアブル（I:4C）、トレボン EW（I:3A）等を散布する。
・ 防除後も斑点米カメムシ類が見られる場合、7～10 日間隔で 1～2 回追加散布する。
- (4) 備 考 ・ 令和6(2024)年度植物防疫ニュースNo.11を当センターHPに掲載中。
・ 近年、これまで見られていなかったイネカメムシによる斑点米や不稔の被害が県内でも散見されている。資料（農林水産省：「不稔米を発生させるイネカメムシの被害にご注意ください」）を参考に発生に注意し、発生がみられる場合には、出穂期の臨機防除を実施する。

3 大豆 吸実性カメムシ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ 7月第 1 半月までのフェロモントラップへのホソヘリカメムシ誘殺数はやや多い (+)。
・ 向こう 1 か月の気温は高く (+)、降水量はほぼ平年並 (±)。
- (3) 対 策 ・ 開花期の 15 日後から子実肥大後期（9月下旬）までにトレボン乳剤（I:3A）等を 10～14 日間隔で散布する。カメムシ類の発生が多い場合は、追加散布する。

4 いちご（育苗）炭疽病

- (1) 発生予想 ・ 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は多い（ほ場率：平年比 257%）(+)。
・ 向こう 1 か月の気温は高く (+)、降水量はほぼ平年並 (±)。
- (3) 対 策 ・ 雨よけ栽培を基本とし、点滴チューブを用いるなど、できるだけ水の跳ね返りのない方法でかん水を行う。
・ 本ほへの持ち込みを防ぐため、育苗での防除を徹底する。予防を主体に、RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
・ 発病株や感染が疑われる株は早急に取り除き、ほ場外で適切に処分する。
・ 発病株周辺の株は、発病が認められなくても潜在感染している可能性があるため、早急に取り除きほ場外で適切に処分する。
- (4) 備 考 ・ 炭疽病薬剤感受性検定結果、令和6(2024)年度植物防疫ニュースNo.9を当センターHPに掲載中。

5 大豆・野菜類・花き類 オオタバコガ			
(1) 発生予想	・ 発生量：多い		
(2) 根 拠	・ フェロモントラップへの成虫誘殺数はやや多い（＋）。 ・ 現在の発生量はトマトで平年並（ほ場率：平年比 118%）（±）、なすで多い（ほ場率：平年比 560%）（＋）。 ・ 向こう 1 か月の気温は高く（＋）、降水量はほぼ平年並（±）。		
(3) 対 策	・ 新しい食害痕や虫フンを目印に早期発見に努める。 ・ 施設は開口部に 5 mm 目合以下の防虫ネットを展張し、侵入を防止する。 ・ 幼虫は果実や花らい、結球部に食入するため、こまめには場を見回り、食害痕や虫フンを発見したら、プレオフロアブル(I:UN)（だいず、いちご、トマト、なす、きく等）やディアナ SC(I:5)（トマト、なす、きく等）等で速やかに防除する。		
(4) 備 考	・ 摘除した果実や脇芽に幼虫が寄生していることがあるので、ほ場内に放置せず、適切に処分する。 ・ 発生ほ場では、土中に残る蛹を殺すため、栽培終了後に十分耕耘する。 ・ <u>令和 6 (2024) 年度植物防疫ニュースNo.5</u> を当センターHP に掲載中。		
6 なし ハダニ類			
(1) 発生予想	・ 発生量：多い		
(2) 根 拠	・ 現在の発生量は多い（ほ場率：平年比 389%）（＋）。 ・ 向こう 1 か月の気温は高く（＋）、降水量はほぼ平年並（±）。 ・ 果樹カメムシ類の多発に伴い、頻繁な殺虫剤散布が実施されている（＋）。		
(3) 対 策	・ ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。 ・ 化学農薬に対する感受性低下が著しいため、RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。		
(4) 備 考	・ <u>ナミハダニ雌成虫及び卵に対する主要薬剤の殺虫効果を当センターHP に掲載中。</u>		
7 りんご 褐斑病			
(1) 発生予想	・ 発生量：多い		
(2) 根 拠	・ 現在の発生量は多い（＋）。 ・ 向こう 1 か月の気温は高く（＋）、降水量はほぼ平年並（±）。		
(3) 対 策	・ 定期的に予防散布を行い、発生が確認されたらファンタジスタ顆粒水和剤(F:11)等を散布する。		
(4) 備 考	・ <u>令和 6 (2024) 年度植物防疫ニュースNo.8</u> を当センターHP に掲載中。		
8 果樹類 果樹カメムシ類			
(1) 発生予想	・ 発生量：多い		
(2) 根 拠	・ 7 月第 3 半旬までのフェロモントラップへのチャバネアオカメムシ成虫の誘殺数は多い（＋）。 ・ 本年のスギ・ヒノキ花粉量は昨年比で少ないため、餌となる球果がカメムシの発生量に対して少なく、果樹園への飛来が増える可能性がある（＋）。 ・ 向こう 1 か月の気温は高く（＋）、降水量はほぼ平年並（±）。		
(3) 対 策	・ 夜間の気温及び湿度が高いと予想される日には、日没以降にカメムシ類が多く飛来するおそれがあるため注意する。 ・ 4 mm 目合以下の多目的防災網で園全体を被覆し、被害を防止する。 ・ 園内で成虫の飛来を認めたら、カメムシ類に登録のある薬剤をローテーション散布する。		
(4) 備 考	・ 山林に隣接したほ場や、過去に被害が大きかったほ場では特に注意する。 ・ ピレスロイド系 (I:3A) 等の非選択性殺虫剤の連用は、各種害虫の天敵相を破壊し、ハダニ類やカイガラムシ類の多発に繋がるので注意する。 ・ <u>令和 6 (2024) 年度病害虫発生予察注意報第 1 号</u> を当センターHP に掲載中。		

9 その他の病害虫							
作物名	病害虫名	現 況	発生予想	作物名	病害虫名	現 況	発生予想
水稲	紋枯病	やや多	多	野菜類等	ハスモンヨトウ	平年並	やや多
	縞葉枯病	平年並	平年並	なし	黒星病	平年並	平年並
いちご	ハダニ類	平年並	やや多	りんご	ハダニ類	少	平年並
	アブラムシ類	やや多	多		斑点落葉病	多	多
トマト	コナジラミ類	多	多	きく	ハダニ類	平年並	やや多

○ほ場内外の除草は害虫防除の基本です！

- ・水田周辺の雑草だけでなく、水田内の雑草（ノビエ、イヌホタルイ等）も斑点米カメムシ類の誘引・発生源となります。また、野菜類や花き類でも、ほ場内外の雑草はハダニ類やアザミウマ類、アブラムシ類の温床となります。適切な除草で、害虫が発生しにくい環境を作りましょう。

○うめ・もも・すもも等 クビアカツヤカミキリ（特定外来生物）

- ・クビアカツヤカミキリが樹木に寄生すると、幹や枝から、レンガ色でうどん状のフラス（幼虫が排出する、木くずと糞が混じったもの）が大量に排出されます。うめ、もも、すもも等の樹木からフラスが出ているのを見つけたら、農業総合研究センター防除課まで御連絡ください。
- ・クビアカツヤカミキリの卵（約1.7mm）は、成虫が発生する6～8月に樹皮のすき間に産卵されます。ブラックライトを照射することで青白く蛍光するため、被害発生前に見つけて除去しましょう。
- ・令和6（2024）年度植物防疫ニュース No. 3を当センターHPに掲載中です。

○かんしょ サツマイモ基腐病

- ・本病は栃木県内での発生は確認されていませんが、令和6（2024）年6月現在、全国35都道県で発生が確認されています。発病すると、地上部の変色及び枯死、イモの腐敗等の症状が現れます。
- ・健全な種苗の導入及び発病株の早期発見により被害の拡大を未然に防止することが重要です。
- ・サツマイモ基腐病に注意！を当センターHPに掲載中です。

農薬は適正に使用しましょう

- 農薬を適正に管理し、容器のラベルをよく読み、農薬による事故等の発生を防止しましょう。
- 化学農薬の抵抗性の発達を防ぐため、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布しましょう。
- 花粉媒介昆虫のミツバチ、マルハナバチや天敵に対する影響日数に注意して薬剤を選択しましょう。

1か月気象予報（予報期間7月20日から8月19日 7月18日気象庁発表）

期間の前半は、気温がかなり高くなる見込みです。平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（％）

項 目	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	1 0	1 0	8 0
降 水 量	4 0	3 0	3 0
日照時間	3 0	3 0	4 0

詳しくは農業総合研究センター 環境技術指導部 防除課（Tel 028-665-1244）までお問合せください。

病虫害情報発表のお知らせはX（旧ツイッター）「栃木県農政部(@tochigi_nousei)」、農業総合研究センターホームページ（<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/index.html>）でもご覧になれます。

令和6(2024)年度 病害虫発生予報 第5号

令和6(2024)年8月23日
栃木県農業総合研究センター
環境技術指導部

害虫と高温性病害の増加に引き続き注意しましょう。

予想期間 8月下旬～9月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 水稻 斑点米カメムシ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・ 8月上旬の水田におけるすくい取り調査での発生量は平年並（成幼虫数 ほ場率：平年比139%、頭数：平年比157%）（±）。
・ 向こう1か月の気温は高く（+）、降水量は多い（-）。
- (3) 対 策 ・ 斑点米カメムシ類が見られる場合は、7～10日間隔で1～2回追加防除する。
- (4) 備 考 ・ [令和6\(2024\)年度植物防疫ニュースNo.11](#)を当センターHPに掲載中。

2 大豆 ベト病

- (1) 発生予想 ・ 発生量：**多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや多い（ほ場率：平年比131%、株率：平年比189%）（+）。
・ 向こう1か月の気温は高く（-）、降水量は多い（+）。
- (3) 対 策 ・ 開花10日前から子実肥大期にザンプロ DMフロアブル（F:45、40）、ベトファイター顆粒水和剤（F:27、40）等を散布する。

3 大豆 吸実性カメムシ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量：**多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや多い（成虫数 ほ場率：平年比173%、頭数：平年比550%）（+）。
・ 8月第3半旬までのフェロモントラップへのホソヘリカメムシ成虫の誘殺数はやや多い（+）。
・ 向こう1か月の気温は高く（+）、降水量は多い（-）
- (3) 対 策 ・ 開花期の15日後から子実肥大後期（9月下旬）までにトレボン乳剤（I:3A）、スミチオン乳剤（I:1B）等を10～14日間隔で散布する。

4 いちご 炭疽病

- (1) 発生予想 ・ 発生量：**多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや多い（ほ場率：平年比84%、株率：平年比300%）（+）。
・ 向こう1か月の気温は高い（+）。
- (3) 対 策 ・ 雨よけ栽培を基本とし、点滴チューブを用いるなど、できるだけ水の跳ね返りのない方法でかん水を行うのが望ましい。
・ 本ぼへの持ち込みを防ぐため、育苗での防除を徹底する。予防を主体に、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
・ 発病株や感染が疑われる株は早急に取り除き、ほ場外で適切に処分する。
・ 発病株周辺の株は、発病が認められなくても潜在感染している可能性があるため、早急に取り除きほ場外で適切に処分する。
- (4) 備 考 ・ [イチゴ炭疽病菌の薬剤感受性検定結果](#)、[令和6\(2024\)年度植物防疫ニュースNo.9](#)を当センターHPに掲載中。

5 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量：**やや多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は平年並（ほ場率：平年比98%、株率：平年比94%）。（±）
・ 向こう1か月の気温は高い（+）。
- (3) 対 策 ・ 育苗期後半～定植当日にモベントフロアブル（I:23）をかん注する。なお、天敵を導入するほ場では、天敵への影響日数（45日）に注意して天敵を放飼する。
・ 定植前に高濃度炭酸ガス処理を適切に行い、本ぼへの持ち込みを抑えるのが望ましい。
- (4) 備 考 ・ [ナミハダニ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

6 なし ハダニ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量：**多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は多い（ほ場率：平年比239%）（+）。
・ 向こう1か月の気温は高く（+）、降水量は多い（-）。

- ・ 果樹カメムシ類の多発に伴い、頻繁な殺虫剤散布が実施されている（＋）。
- (3) 対 策 ・ ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
- ・ 化学農薬に対する感受性低下が著しいため、RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- (4) 備 考 ・ [令和6（2024）年度植物防疫ニュースNo.12](#)を当センターHPに掲載中。
- ・ [ナミハダニ雌成虫及び卵に対する主要薬剤の殺虫効果](#)を当センターHPに掲載中。

7 りんご 褐斑病

- (1) 発生予想 ・ 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量が多い（ほ場率：平年比 211%、葉率：平年比 256%）（＋）。
- ・ 向こう1か月の気温は高く（＋）、降水量は多い（＋）。
- (3) 対 策 ・ 定期的に予防散布を行い、発生が確認されたらベルクトフロアブル(F:M07)等を散布する。
- (4) 備 考 ・ [令和6（2024）年度植物防疫ニュースNo.8](#)を当センターHPに掲載中。

8 大豆・野菜類・花き類 オオタバコガ

- (1) 発生予想 ・ 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ 8月第3半旬までのフェロモントラップへの成虫誘殺数は多い（＋）。
- ・ 現在の発生量はトマトで平年並（ほ場率：平年比 91%）（±）、なすで多い（ほ場率：平年比 371%）（＋）。
- ・ 向こう1か月の気温は高く（＋）、降水量は多い（－）。
- (3) 対 策 ・ 新しい食害痕や虫フンを目印に早期発見に努める。
- ・ 施設は開口部に5mm目合以下の防虫ネットを展張し、侵入を防止する。
- ・ 幼虫は果実や花らい、結球部に食入するため、こまめにほ場を見回り、食害痕や虫フンを発見したら、アニキ乳剤(I:6)（いちご、トマト、なす、きく等）やプレバソnfフロアブル5(I:28)（だいず、トマト、なす等）等で速やかに防除する。
- ・ 摘除した果実や腋芽に幼虫が寄生していることがあるので、ほ場内に放置せず、適切に処分する。
- ・ 発生ほ場では、土中に残る蛹を殺すため、栽培終了後に十分耕耘する。
- (4) 備 考 ・ [令和6（2024）年度植物防疫ニュースNo.5](#)を当センターHPに掲載中。

9 果樹類 果樹カメムシ類

- (1) 発生予想 ・ 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ 8月第3半旬までのフェロモントラップへのチャバネアオカメムシ成虫の誘殺数は多い（＋）。
- ・ 本年のスギ・ヒノキ花粉量は昨年比で少ないため、餌となる球果がカメムシの発生量に対して少なく、果樹園への飛来が増える可能性がある（＋）。
- ・ 向こう1か月の気温は高く（＋）、降水量は多い（－）。
- (3) 対 策 ・ 夜間の気温及び湿度が高いと予想される日には、日没以降にカメムシ類が多く飛来するおそれがあるため注意する。
- ・ 4mm目合以下の多目的防災網で園全体を被覆し、被害を防止する。
- ・ 園内で成虫の飛来を認めたら、カメムシ類に登録のある薬剤をローテーション散布する。
- (4) 備 考 ・ 山林に隣接したほ場や、過去に被害が大きかったほ場では特に注意する。
- ・ ピレスロイド系(I:3A)等の非選択性殺虫剤の連用は、各種害虫の天敵相を破壊し、ハダニ類やカイガラムシ類の多発に繋がるので注意する。
- ・ [令和6（2024）年度病害虫発生予察注意報第1号](#)を当センターHPに掲載中。

10 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現 況	発生予想	作物名	病害虫名	現 況	発生予想
水稻	いもち病	やや少	やや少	トマト	コナジラミ類	やや多	多
	紋枯病	やや多	多	ねぎ	黒斑病・葉枯病	平年並	やや多
大豆・野菜類	ハスモンヨトウ	平年並	平年並	りんご	斑点落葉病	多	多
いちご	アブラムシ類	平年並	やや多	きく	ハダニ類	やや多	多

○トマト黄化葉巻病（TYLCV）の防除対策

- ・TYLCVはタバココナジラミによって媒介されます。夏秋トマトで黄化葉巻病が発生したほ場では、残さに寄生している媒介虫を施設外に「出さない」対策を徹底しましょう。

○定植前・定植時の防除の徹底

- ・いちご、トマト、きゅうり等の施設栽培では、定植前～定植後にかけて、施設内に病害虫を「入れない・持ち込まない」対策を徹底しましょう。
- ・定植時の苗に対する薬剤処理（粒剤・灌注剤等）によって、施設への害虫の持ち込みを防止しましょう。
- ・施設開口部への防虫ネットの展張によって、コナジラミ類やアザミウマ類等の微小害虫、ハスモンヨトウやオオタバコガ等のチョウ目害虫の侵入を防止しましょう。
- ・イチゴ炭疽病やイチゴ萎黄病、トマト黄化葉巻病（タバココナジラミ媒介）、キュウリ黄化えそ病（ミナミキイロアザミウマ媒介）等の施設内での発生・まん延を防止するため、定植時に感染が疑われる苗は適切に処分し、健全苗の定植に努めましょう。

○トマト・なす等 トマトキバガ

- ・外来害虫である本種の国内における確認報告が相次いでおり、8月現在、41道府県で発生が確認されています。栃木県における発生は確認されていませんが、飛翔による分散や苗類等を介して本県での発生が懸念されます。発生が疑われる場合はお近くの農業振興事務所もしくは農業総合研究センターへ御連絡ください。
- ・[注意喚起チラシ](#)を当センターHPに掲載中です。

農薬は適正に使用しましょう

- 農薬を適正に管理し、容器のラベルをよく読み、農薬による事故等の発生を防止しましょう。特に使用時期（収穫前日数）に注意して農薬を使用しましょう。
- 化学農薬の抵抗性の発達を防ぐため、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布しましょう。
- 花粉媒介昆虫のミツバチ、マルハナバチや天敵に対する影響日数に注意して薬剤を選択しましょう。

1か月気象予報（予報期間8月24日から9月23日 8月22日気象庁発表）

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。期間の前半は気温がかなり高くなる可能性があります。湿った空気の影響を受けやすい時期があるため、向こう1か月の降水量は多いでしょう。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（％）

項 目	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	1 0	1 0	8 0
降 水 量	2 0	3 0	5 0
日照時間	4 0	3 0	3 0

詳しくは農業総合研究センター 環境技術指導部 防除課（Tel 028-665-1244）までお問合せください。

病害虫情報発表のお知らせはX（旧ツイッター）「栃木県農政部(@tochigi_nousei)」、農業総合研究センターホームページ（<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/index.html>）でもご覧になれます。

令和6(2024)年度 病害虫発生予報 第6号

令和6(2024)年9月20日
栃木県農業総合研究センター
環境技術指導部

高温・寡照で病害が発生しやすくなるので注意しましょう！

予想期間 9月下旬～10月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：やや少ない
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は少ない（ほ場率：平年比0%、株率：平年比0%）。(-)
・ 向こう1か月の気温は高く(-)、降水量は多く(+)、日照時間は少ない見込み。(+)
- (3) 対 策 ・ 株が軟弱徒長すると発生しやすくなるので、適正な温度管理やかん水を行う。
・ 予防を主体に、ベルクートフロアブル(RAC コードF:M07)等を使用する。

2 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は平年並（ほ場率：平年比111%、株率：平年比42%）。(±)
・ 向こう1か月の気温は高い見込み。(+)
- (3) 対 策 ・ ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
・ 化学農薬に対する感受性低下が起りやすいため、必ずローテーション散布を行うとともに、抵抗性が発達しにくい気門封鎖剤や天敵製剤を活用する。
・ 天敵導入時にハダニ類が多いと失敗しやすいので、天敵導入前に気門封鎖剤や天敵に影響の小さい薬剤を散布し、ハダニ類の増殖を抑制しておく。
- (4) 備 考 ・ [ナミハダニ薬剤感受性検定結果](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

3 いちご アブラムシ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は多い（ほ場率：平年比344%、株率：平年比175%）。(+)
・ 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量は多い見込み。(-)
- (3) 対 策 ・ ほ場をこまめに観察し、発生を確認したらモスピラン顆粒水溶剤(I:4A)等を葉裏にもよくかかるように散布する。

4 果菜類 コナジラミ類（トマト：黄化葉巻病(TYLCV)、黄化病(ToCV)・きゅうり：退緑黄化病(CCYV)）

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ トマトの現在のコナジラミ類の発生はやや多く(±～+)、一部のほ場では既に黄化葉巻病の発生が確認されている。(+) きゅうりの現在の発生量は平年並。(±)
・ 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量は多い見込み。(-)
- (3) 対 策 ・ ウイルスを媒介するコナジラミ類の侵入を防ぐため、ハウスの開口部(出入り口、側窓、天窗)に0.4mm目合以下のネットを張り、特に出入り口は二重にする。
・ 黄色粘着板の設置により、コナジラミ類の早期発見に努める。
・ 発病株は伝染源となるので、見つけ次第抜き取る。抜き取った株は放置せず、土中に埋設するか、ポリ袋などで密封し枯死させてから処分する。
・ トマト黄化葉巻病では、耐病性品種であっても感染すると伝染源となる。黄化病等に感染することもあるため、感受性品種と同様に適切な防除を行う。
- (4) 備 考 ・ [防除のポイントNo.22](#)、[タバココナジラミ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

5 ねぎ 黒斑病・葉枯病

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は平年並（ほ場率：平年比103%、株率：平年比41%）。(±)
・ 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量は多い見込み。(+)
- (3) 対 策 ・ 発生初期の防除に重点を置く。多湿条件で発生しやすいため、秋雨期や曇雨天が続く場合は発生に注意して防除を行う。
・ 窒素過多は病害が発生しやすいため、適正な肥培管理を実施する。
・ 残さは、ほ場外に持ち出し適切に処分する。

6 ねぎ シロイチモジヨトウ

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根 掘
 - ・ 現在の発生量が多い。(＋)
 - ・ 向こう1か月の気温は高く(＋)、降水量は多い見込み。(－)
- (3) 対 策
 - ・ ほ場をこまめに観察し、本種による被害葉(葉が白く透けて垂れ下がる)を探すなど早期発見に努め、卵塊や分散前の幼虫を寄生葉とともに摘み取り処分する。
 - ・ 幼虫の齢期が進むと薬剤が効きにくくなるため、葉に食入する前の若齢のうちに薬剤防除を行う。
 - ・ 展着剤を使用し、RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。

7 野菜類(いちご・なす・キャベツ・レタス等)・花き類・大豆 ハスモンヨトウ

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
- (2) 根 掘
 - ・ 9月第2半旬までのフェロモントラップによる誘殺数は平年並。(±)
 - ・ 現在の発生量は、いちご、なすおよびきくでは少ない(－)が、大豆では平年並。(±)
 - ・ 向こう1か月の気温は高く(＋)、降水量は多い(－)見込み。
- (3) 対 策
 - ・ 定期的にはほ場を観察して早期発見に努め、卵塊や分散前の幼虫を寄生葉とともに摘み取り処分する。
 - ・ 幼虫の齢期が進むと薬剤が効きにくくなるので、発生初期の若齢幼虫のうちに薬剤防除を行う。

8 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現 況	発生予想	作物名	病害虫名	現 況	発生予想
いちご	炭疽病	やや多	やや多	にら	アザミウマ類	平年並	平年並
きゅうり	うどんこ病	やや少	平年並	きく	アブラムシ類	多	多
	褐斑病	やや多	多		アザミウマ類	多	多
	アザミウマ類	少	やや少	野菜類・花き類	オオタバコガ	やや多	やや多

秋の病害虫防除対策

○水稲 縞葉枯病(媒介昆虫：ヒメトビウンカ)、黄萎病(媒介昆虫：ツマグロヨコバイ)

- ・ 縞葉枯病や黄萎病が発生したほ場の再生稲(ひこばえ)は、媒介昆虫の増殖源および病原の獲得源になるため、早めに丁寧な耕起を行いましょう。また、媒介昆虫の越冬場所をなくすため、ほ場周辺の除草を徹底しましょう。

○麦類 種子伝染性病害

- ・ オオムギ斑葉病や小麦なまぐさ黒穂病、ムギ類黒節病等の防除のため、種子消毒を必ず行いましょう。なお、オオムギ斑葉病は遅まきすると発病が多くなるため、適期には種を行いましょう。

○いちご 炭疽病・萎黄病

- ・ 症状が出てからの防除は困難であるため、発病株及び感染が疑われる株は早急に取り除き、ほ場外で適切に処分しましょう。

○いちご アザミウマ類

- ・ 10月中旬までに開花が進んでいるほ場では、アザミウマ類の野外からの飛び込みが多くなる傾向にあります。1～3月頃の発生はハウス内の残存個体由来するため、飛び込み終了後の防除によって、翌春までの密度を抑制する効果が期待できます。施設周辺の除草を徹底し、発生初期のうちに薬剤散布を行うなど、適切に防除しましょう。

○なし 黒星病・炭疽病、りんご 斑点落葉病・褐斑病

- ・ 病原菌は芽や落葉で越冬し、翌年の発生源となります。収穫終了後は徒長枝の先端までまんべんなく薬液がかかるよう丁寧に薬剤散布を行いましょう。防除の際は周辺へ飛散(ドリフト)しないよう十分注意しましょう。落葉は重要な伝染源となるため、ほ場外に持ち出し、適切に処分しましょう。
- ・ [ナシ炭疽病薬剤感受性検定結果](#)、[リンゴ褐斑病薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中です。

○トマト・なす等 トマトキバガ

- ・ 外来害虫である本種の国内における確認報告が相次いでおり、9月現在、42道府県で発生が確認されています。栃木県における発生は確認されていませんが、飛翔による分散や苗類等を介して本県での発生が懸念されます。発生が疑われる場合はお近くの農業振興事務所もしくは農業総合研究センターへ御連絡ください。
- ・ [注意喚起チラシ](#)を当センターHPに掲載中です。

○農薬を適正に管理し、容器のラベルをよく読み、農薬による事故等の発生を防止しましょう。

○同一薬剤の連用を避け、異なる RAC コードの薬剤をローテーション散布しましょう。

1か月気象予報（予報期間9月21日から10月20日 9月19日気象庁発表）

向こう1か月の気温は、暖かい空気に覆われやすいため高いでしょう。期間の前半は、この時期としてはかなり高くなる見込みです。秋雨前線や湿った空気の影響を受けやすい時期があるため、向こう1か月の降水量は多く、日照時間は少ないでしょう。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（％）

項 目	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	1 0	1 0	8 0
降 水 量	2 0	3 0	5 0
日照時間	5 0	3 0	2 0

詳しくは農業総合研究センター 環境技術指導部 防除課（Tel. 028-665-1244）までお問合せください。

病虫害情報発表のお知らせはX（旧ツイッター）「栃木県農政部([@tochigi_nousei](https://twitter.com/tochigi_nousei))」、農業総合研究センターホームページ（<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/index.html>）でもご覧になれます



令和6(2024)年度 病害虫発生予報 第7号

令和6(2024)年10月18日
栃木県農業総合研究センター
環境技術指導部

多湿条件が続くため病害の発生に注意しましょう！

予想期間 10月下旬～11月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや少ない(ほ場率：平年比50%、株率：平年比17%)。(-)
・ 向こう1か月の降水量は平年並か多く(+)、日照時間は平年並か少ない見込み。(+)
- (3) 対 策 ・ 株が軟弱徒長すると発生しやすくなるので、適正な温度管理やかん水を行う。
・ 予防を主体に、フルピカフロアブル(RACコードF:9)等を使用する。
・ 曇雨天時にはくん煙剤を使用する。硫黄くん煙は天敵に対し悪影響があるので天敵導入ほ場では長時間のくん煙処理は避ける。

2 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：**やや多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は平年並(ほ場率：平年比106%、株率：平年比62%)。(±)
・ 向こう1か月の気温は高い見込み。(+)
- (3) 対 策 ・ ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
・ 化学農薬に対する感受性低下が起こりやすいため、必ずローテーション散布を行うとともに、抵抗性が発達しにくい気門封鎖剤や天敵製剤を活用する。
・ 天敵導入時にハダニ類が多いと失敗しやすいので、天敵導入前に気門封鎖剤や天敵に影響の小さい薬剤を散布し、ハダニ類の密度を下げておく。
- (4) 備 考 ・ [ナミハダニ薬剤感受性検定結果](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

3 いちご アブラムシ類

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は平年並(ほ場率：平年比91%、株率：平年比117%)。(-)
・ 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量は平年並か多い見込み。(-)
- (3) 対 策 ・ ほ場をこまめに観察し、発生を確認したらベネビア OD (I:28)等を葉裏にもよくかかるように散布する。

4 いちご アザミウマ類

- (1) 発生予想 発生量：**平年並**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は平年並(±)
向こう1か月の気温は高く(+)、降水量は平年並か多い見込み。(-)
- (3) 対 策 ・ 施設内外の除草を行う。
・ 花をよく観察して、観察した花の1割以上にアザミウマ類が見られる場合には、スピノエース顆粒水和剤(I:5)等を散布する。
- (4) 備 考 ・ [防除のポイントNo.19](#)、[アザミウマ薬剤感受性検定結果①](#)、[②](#)を当センターHPに掲載中。

5 トマト すずかび病

- (1) 発生予想 発生量：**多い**
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量が多い(ほ場率：278%)。(+)
・ 向こう1か月の気温は高く(+)、降水量は平年並か多い見込み。(-)
- (3) 対 策 ・ 施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。また、循環扇や暖房機等を用いた通風により、結露防止に努める。
・ 発病葉は伝染源となるため、発生初期に速やかに取り除き、施設外で処分する。
・ 予防を主体に、パレード 20フロアブル(F:7)等を葉裏によくかかるように散布する。
- (4) 備 考 ・ [すずかび病薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

6 果菜類 コナジラミ類(トマト：黄化葉巻病(TYLCV)、黄化病(ToCV)・きゅうり：退緑黄化病(CCYV))

- (1) 発生予想 発生量：**多い**
- (2) 根 拠 ・ トマトの現在のコナジラミ類の発生はやや多く(±～+)、一部のほ場では既に黄化葉巻病の発生が確認されている。(+)きゅうりの現在の発生量が多い。(+)

- (3) 対 策
- ・ 向こう 1 か月の気温は高く (+)、降水量は平年並が多い見込み。(一)
 - ・ ウイルスを媒介するコナジラミ類の侵入を防ぐため、ハウスの開口部(出入り口、側窓、天窗)に 0.4mm 目合以下のネットを張り、特に出入り口は二重にする。
 - ・ 黄色粘着板の設置により、コナジラミ類の早期発見に努める。
 - ・ 発病株は伝染源となるので、見つけ次第抜き取る。抜き取った株は放置せず、土中に埋設するか、ポリ袋などで密封し枯死させてから処分する。
 - ・ トマト黄化葉巻病では、耐病性品種であっても感染すると伝染源となる。黄化病等に感染することもあるため、感受性品種と同様に適切な防除を行う。
- (4) 備 考
- ・ [防除のポイントNo.22、タバココナジラミ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHP に掲載中。

7 ねぎ 黒斑病・葉枯病

- (1) 発生予想
- 発生量：やや多い
- (2) 根 拠
- ・ 現在の発生量は平年並。(ほ場率：平年比 105%、株率：平年比 103%)。(±)
 - ・ 向こう 1 か月の気温は高く (一)、降水量は平年並が多い見込み。(十)
- (3) 対 策
- ・ 発生初期の防除に重点を置く。多湿条件で発生しやすいため、秋雨期や曇雨天が続く場合は発生に注意して防除を行う。
 - ・ 残さは、ほ場外に持ち出し適切に処分する。

8 野菜類(いちご・キャベツ・レタス等)・花き類 ハスモンヨトウ

- (1) 発生予想
- 発生量：平年並
- (2) 根 拠
- ・ 10 月第 1 半旬までのフェロモントラップによる誘殺数は平年並。(±)
 - ・ 現在の発生量は、いちごではやや少ない。(一)
 - ・ 向こう 1 か月の気温は高く (+)、降水量は平年並が多い見込み。(一)
- (3) 対 策
- ・ 定期的にはほ場を観察して早期発見に努め、卵塊や分散前の幼虫を寄生葉とともに摘み取り処分する。
 - ・ 幼虫の齢期が進むと薬剤が効きにくくなるので、発生初期の若齢幼虫のうちに薬剤防除を行う。

9 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現 況	発生予想	作物名	病害虫名	現 況	発生予想
ねぎ	シロイチモジヨトウ	多	多	きく	アザミウマ類	平年並	平年並
	アザミウマ類	平年並	平年並		ハダニ類	平年並	やや多
にら	アザミウマ類	平年並	平年並	野菜類・花き類	オオタバコガ	やや多	やや多
きゅうり	褐斑病	多	多				

秋の病害虫防除対策

○水稲 越冬害虫

- ・ 再生稲(ひこばえ)は、縞葉枯病(媒介昆虫：ヒメトビウンカ)、黄萎病(媒介昆虫：ツマグロヨコバイ)の媒介虫の増殖源及び病原の獲得源になる他、斑点米の原因となるイネカメムシの一時的な生息場所となるため、早めに丁寧な耕起を行いましょう。

○麦類 種子伝染性病害

- ・ オオムギ斑葉病や小麦なまぐさ黒穂病、ムギ類黒節病等の防除のため、種子消毒を必ず行いましょう。なお、オオムギ斑葉病は遅まきすると発病が多くなるため、適期には種を行いましょう。

○いちご 炭疽病・萎黄病

- ・ 発病株及び感染が疑われる株は早急に取り除き、ほ場外で適切に処分しましょう。

○なし 黒星病・炭疽病、りんご 斑点落葉病・褐斑病

- ・ 病原菌は芽や落葉で越冬し、翌年の発生源となります。収穫終了後は徒長枝の先端までまんべんなく薬液がかかるよう丁寧に薬剤散布を行いましょう。防除の際は周辺へ飛散(ドリフト)しないよう十分注意しましょう。

○トマト・なす等 トマトキバガ

- ・ 外来害虫である本種の国内における確認報告が相次いでおり、10 月 1 日現在、43 道府県で発生が確認されています。飛翔による分散や苗類等を介して本県での発生が懸念されます。発生が疑われる場合はお近くの農業振興事務所もしくは農業総合研究センターへ御連絡ください。
- ・ [注意喚起チラシ](#)を当センターHP に掲載中です。

- 農薬を適正に管理し、容器のラベルをよく読み、農薬による事故等の発生を防止しましょう。
- 同一薬剤の連用を避け、異なる RAC コードの薬剤をローテーション散布しましょう。
- 天敵、ミツバチ、マルハナバチを使用している施設では、農薬の選択や使用法に特に注意しましょう。

1 か月気象予報（予報期間 10 月 19 日から 11 月 18 日 10 月 17 日気象庁発表）

向こう 1 か月の気温は、暖かい空気に覆われやすいため高いでしょう。特に、期間の前半は、かなり高くなる見込みです。気圧の谷や湿った空気の影響を受けやすい時期があるため、向こう 1 か月の降水量は平年並が多く、日照時間は平年並か少ないでしょう。

向こう 1 か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（％）

項 目	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	1 0	1 0	8 0
降 水 量	2 0	4 0	4 0
日照時間	4 0	4 0	2 0

詳しくは農業総合研究センター 環境技術指導部 防除課（Tel 028-665-1244）までお問合せください。

病虫害情報発表のお知らせはX（旧ツイッター）「栃木県農政部(@tochigi_nousei)」、農業総合研究センターホームページ（<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/index.html>）でもご覧になれます



令和6(2024)年度 病害虫発生予報 第8号

令和6(2024)年11月22日
栃木県農業総合研究センター
環境技術指導部

病害虫の早期発見に努め、適切に防除しましょう！

予想期間 11月下旬～12月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：やや少ない
- (2) 根 拠
- 現在の発生量は少ない。(一)
 - 向こう1か月の気温は平年並か高く(±～+)、降水量はほぼ平年並(±)、日照時間はほぼ平年並の見込み(±)。
- (3) 対 策
- 株が軟弱徒長すると発生しやすくなるため、適正な温度管理やかん水を行う。
 - 予防を主体に、シグナムWDG(RACコード F:11、7)等を葉裏にもよくかかるように散布する。曇雨天時にはくん煙剤を使用するが、硫黄くん煙は天敵に対し悪影響があるため、天敵導入ほ場では長時間のくん煙処理は避ける。

2 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根 拠
- 現在の発生量はやや多い(ほ場率：平年比165%、株率：平年比176%)。(±～+)
 - 向こう1か月の気温は平年並か高く(±～+)、日照時間はほぼ平年並の見込み(±)。
- (3) 対 策
- ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
 - 化学農薬に対する感受性低下が起こりやすいため、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布する。
 - 天敵導入時にハダニ類が多いと失敗しやすいため、天敵導入前に気門封鎖剤や天敵に影響の小さい薬剤を散布し、ハダニ類の増殖を抑制しておく。
- (4) 備 考
- [ナミハダニ薬剤感受性検定結果](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

3 果菜類 コナジラミ類(トマト：黄化葉巻病(TYLCV)、黄化病(ToCV)・きゅうり：退緑黄化病(GCYV))

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根 拠
- トマトでは、現在のコナジラミ類の発生はやや多く(±～+)。
 - きゅうりでは、現在の発生量はやや多い。(±～+)
 - 向こう1か月の気温は平年並か高く(±～+)、降水量はほぼ平年並(±)、日照時間はほぼ平年並の見込み(±)。
- (3) 対 策
- ウイルスを媒介するコナジラミ類の侵入を防ぐため、ハウスの開口部(出入り口、側窓、天窗)に0.4mm目合以下のネットを張り、特に出入り口は二重にする。
 - 黄色粘着板の設置により、コナジラミ類の早期発見に努める。
 - ウイルス病の発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取る。抜き取った株は放置せず、土中に埋設するか、ポリ袋などで密封し枯死させてから処分する。
 - 耐病性品種を作付けた場合でも、コナジラミ類を防除する。
- (4) 備 考
- [防除のポイントNo22](#)、[タバココナジラミ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

4 トマト すずかび病

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根 拠
- すずかび病の現在の発生量は多い。(+)
 - 向こう1か月の気温は平年並か高く(±～+)、降水量はほぼ平年並(±)、日照時間はほぼ平年並の見込み(±)。
- (3) 対 策
- 施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。また、循環扇や暖房機等を用いた通風により、結露防止に努める。
 - 発病葉は伝染源となるため、発生初期に速やかに取り除き、施設外で処分する。
 - 予防を主体にアミスターオプティフロアブル(F:11、M5)等を葉裏にもよくかかるように散布する。
- (4) 備 考
- [すずかび病薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

5 きゅうり べと病

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや多い（ほ場率：平年比 148%、葉率：平年比 333%）。(±)
- ・ 向こう 1 か月の気温は平年並か高く（±～+）、降水量はほぼ平年並（±）、日照時間はほぼ平年並の見込み（±）。
- (3) 対 策 ・ 施設内が多湿にならないよう適切な換気を行うとともにかん水量に注意する。
- ・ 草勢低下は発生を助長させるため、適正な肥培管理を行う。
- ・ 予防を主体にリドミルゴールド MZ (F: M3, 4) 等を散布する。

6 にら 白斑葉枯病

- (1) 発生予想 発生量：平年並
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや少ない（ほ場率：平年比 100%）。(－～±)
- ・ 向こう 1 か月の気温は平年並か高く（±～+）、降水量はほぼ平年並（±）、日照時間はほぼ平年並の見込み（±）。
- (3) 対 策 ・ 施設内が多湿にならないよう、日中の気温の高いときに喚起する。
- ・ 捨て刈りした葉は伝染源となるため、施設外に持ち出し、適切に処分する。
- ・ 発生初期に、セイビアーフロアブル 20 (F:12) 等を散布する。

7 野菜類（いちご等）・花き類 ハスモンヨトウ

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ 11 月第 2 半旬までのフェロモントラップによる誘殺数はやや多い。(±～+)
- ・ 現在の発生量は、いちごでは多い。(＋)
- ・ 向こう 1 か月の気温は平年並か高く（±～+）、降水量はほぼ平年並の見込み（±）。
- (3) 対 策 ・ 定期的にほ場を観察して早期発見に努め、卵塊や分散前の幼虫を寄生葉とともに摘み取り処分する。
- ・ 幼虫の齢期が進むと薬剤が効きにくくなるため、発生初期の若齢幼虫のうちに薬剤防除を行う。

8 その他の病虫害

作物名	病虫害名	現況	発生予想	作物名	病虫害名	現況	発生予想
いちご	アザミウマ類	やや多	やや多	きゅうり	褐斑病	多い	多い
	アブラムシ類	やや多	やや多	にら	アザミウマ類	やや少	やや少
トマト	灰色かび病	少	少	きく	ハダニ類	やや少	平年並

季節の病虫害防除対策

○水稲 越冬害虫

- ・再生稲（ひこばえ）は、縞葉枯病（媒介昆虫：ヒメトビウンカ）、黄萎病（媒介昆虫：ツマグロヨコバイ）の媒介虫の増殖源及び病原の獲得源になる他、斑点米の原因となるイネカメムシの一時的な生息場所となるため、早めに丁寧な耕起を行いましょう。

○いちご アザミウマ類

- ・11 月頃までに野外から侵入したアザミウマ類は、ハウス内で生存し、春先の被害の原因となります。花をよく観察し、その 1 割以上にアザミウマ類が認められる場合には、薬剤防除を行いましょう。

○トマト・なす等 トマトキバガ

- ・令和 6 (2024) 年 10 月、栃木県内で初めてトマトキバガのフェロモントラップへの誘殺が確認されました（[令和 6 \(2024\) 年度病虫害発生予察特殊報第 1 号](#)）。本県においては、本種によるトマトやなすへの被害は確認されていませんが、疑わしい虫や被害を見つけた場合には、適切に薬剤防除を行いましょう。

○果樹類 病害

- ・整枝・せん定作業時には、罹病枝を取り除くか被害部を削り取り、切口にゆ合剤を塗布しましょう。また、落葉は様々な病害の伝染源となるため、適切に処分しましょう。

農薬の安全使用等

○薬剤抵抗性発達の抑制

- ・薬剤で防除する際には、RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布しましょう。

○「栃木県農薬危害防止運動」実施中（令和 6 年 11 月から令和 7 年 1 月）

- ・農薬は適正に管理しましょう。また、農薬を使用する際には、容器のラベルに記載された内容を遵守し、農薬による事故等の発生を防止しましょう。

1か月気象予報（予報期間11月23日から12月22日 11月21日 気象庁発表）

- ・向こう1か月の気温は、期間の前半を中心に寒気の影響を受けにくいと、平年並か高いでしょう。
- ・平年と同様に晴れの日が多いでしょう。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（％）

項 目	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	20	40	40
降 水 量	40	30	30
日照時間	30	30	40

詳しくは農業総合研究センター 環境技術指導部 防除課（Tel 028-665-1244）までお問合せください。

病虫害情報発表のお知らせはX（旧ツイッター）「栃木県農政部 (@tochigi_nousei)」、農業総合研究センターホームページ (<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/index.html>) でもご覧になれます。



～栃木県からのお知らせです～

11月～1月は、「栃木県農薬危害防止運動」の実施期間です。



- ・安全作業の第一歩！ 農薬散布時の身支度は万全に！
- ・いつものチェック！ 農薬使用の際は、ラベルをよく読み正しく使いましょう！
- ・農薬散布のその前に！ 風量や風向きに注意して、飛散防止に努めましょう！
- ・周辺への配慮！ 住宅地等でやむを得ず農薬を使用する際は十分に配慮しましょう！
- ・農薬散布のその後に！ 防除器具の洗浄も必ず行いましょう！

令和6(2024)年度 病害虫発生予報 第9号

令和6(2024)年12月20日
栃木県農業総合研究センター
環境技術指導部

病害虫の早期発見に努め、適切に防除しましょう！

予想期間 12月下旬～1月下旬 予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：少ない
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は少ない。(－)
- ・ 向こう1か月の気温は低く(+)、降水量は少なく(－)、日照時間は多い見込み。(－)
- (3) 対 策 ・ 多湿条件において発生しやすいので、下葉を除去し株元の風通しをよくするとともに、かん水過多にならないように注意する。
- ・ 発病した果実や果梗等は伝染源となるので、速やかに取り除き、施設外で処分する。
- ・ 予防を主体に、セイビアーフロアブル 20(RAC コード F:12)等を葉裏にもよくかかるように散布する。
- (4) 備 考 ・ [灰色かび病薬剤感受性結果①、②](#)を当センターホームページ (HP) に掲載中。

2 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：平年並
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は平年並 (ほ場率：平年比 93%、株率：平年比 50%)。(±)
- ・ 向こう1か月の気温は低く(+)、降水量は少なく(－)、日照時間は多い見込み。(－)
- (3) 対 策 ・ 株が軟弱徒長すると発生しやすくなるので、適正な温度管理やかん水を行う。
- ・ 予防を主体に、ベルコートフロアブル(F:M7)等を葉裏にもよくかかるように散布する。
- ・ 曇雨天時にはくん煙剤を使用するが、硫黄くん煙は天敵に対し悪影響があるので天敵導入ほ場では長時間のくん煙処理は避ける。

3 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：平年並
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は平年並 (ほ場率：平年比 88%、株率：平年比 86%)。(±)
- ・ 向こう1か月の気温は低く(－)、日照時間は多い見込み。(＋)
- (3) 対 策 ・ ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
- ・ 化学農薬に対する感受性低下が起りやすいため、RAC コードの異なる薬剤をローテーション散布する。
- ・ 天敵導入時にハダニ類が多いと失敗しやすいので、天敵導入前に気門封鎖剤や天敵に影響の小さい薬剤を散布し、ハダニ類の増殖を抑制しておく。
- (4) 備 考 ・ [ナミハダニ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHP に掲載中。

4 いちご アザミウマ類

- (1) 発生予想 発生量：平年並
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は平年並 (ほ場率：平年比 60%、株率：平年比 33%)。(±)
- ・ 向こう1か月の気温は低く(－)、日照時間は多い見込み。(＋)
- (3) 対 策 ・ 花を良く観察して、アザミウマ類が見られた場合には、マツチ乳剤(I:15)を散布する。
- (4) 備 考 ・ [防除のポイントNo.19](#)、[アザミウマ薬剤感受性検定結果①、②](#)を当センターHP に掲載中。

5 トマト 灰色かび病

- (1) 発生予想 発生量：やや少ない
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量はやや少ない (ほ場率：平年比 69%)。(－～±)
- ・ 向こう1か月の気温は低く(+)、降水量は少なく(－)、日照時間は多い見込み。(－)
- (3) 対 策 ・ 施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。また、循環扇や暖房機等を用いた通風により、結露防止に努める。
- ・ 発病した果実や葉等は伝染源となるので、速やかに取り除き、施設外で処分する。
- ・ 予防を主体に、フルピカフロアブル(F:9)等を葉裏にもよくかかるように散布する。
- (4) 備 考 ・ [灰色かび病薬剤感受性結果①、②](#)を当センターホームページ (HP) に掲載中。

6 トマト すすかび病

- (1) 発生予想 発生量：多い
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は多い。(+)
・ 向こう1か月の気温は低く(－)、日照時間は多い見込み。(＋)
- (3) 対 策 ・ 施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。また、循環扇や暖房機等を用いた通風により、結露防止に努める。
・ 発病葉は伝染源となるため、発生初期に速やかに取り除き、施設外で処分する。
・ トリフミン水和剤(F:3)等を葉裏にもよくかかるように散布する。
- (4) 備 考 ・ [すすかび病薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

7 果菜類 コナジラミ類(トマト：黄化葉巻病(TYLCV)、黄化病(ToCV)・きゅうり：退緑黄化病(CCYV))

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根 拠 ・ 現在のコナジラミ類の発生量は、トマトでやや多い(ほ場率：平年比158%)。(±～＋)
・ きゅうりではやや多い(ほ場率：平年比87%)。(±～＋)
・ 向こう1か月の気温は低く(－)、日照時間は多い見込み。(＋)
- (3) 対 策 ・ ウイルスを媒介するコナジラミ類の侵入を防ぐため、ハウスの開口部(出入り口、側窓、天窓)に0.4mm目合以下のネットを張り、特に出入り口は二重にする。
・ 黄色粘着板の設置により、コナジラミ類の早期発見に努める。
・ ウイルス病の発病株は伝染源となるため、見つけ次第抜き取る。抜き取った株は放置せず、土中に埋設するか、ポリ袋などで密封し枯死させてから処分する。
・ 耐病性品種を作付けした場合でも、コナジラミ類を防除する。
- (4) 備 考 ・ [防除のポイントNo22](#)、[タバココナジラミ薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

8 きゅうり べと病

- (1) 発生予想 発生量：平年並
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は平年並(ほ場率：平年比96%、葉率：平年比61%)。(±)
・ 向こう1か月の気温は低く(－)、降水量は少なく(－)、日照時間は多い見込み。(＋)
- (3) 対 策 ・ 施設内が多湿にならないよう適切な換気を行うとともにかん水量に注意する。
・ 草勢低下は発生を助長させるので、適正な肥培管理を行う。
・ 予防を主体にアリエッティC水和剤(F:M4、P7)等を散布する。
- (4) 備 考 ・ [べと病薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

9 にら 白斑葉枯病

- (1) 発生予想 発生量：平年並
- (2) 根 拠 ・ 現在の発生量は平年並(ほ場率：平年比124%、株率：平年比32%)。(±)
・ 向こう1か月の気温は低く(＋)、降水量は少なく(－)、日照時間は多い見込み。(－)
- (3) 対 策 ・ 施設内が多湿にならないよう、日中の気温の高いときを見計らって換気を行う。
・ 捨て刈りした葉は伝染源となるため、施設外に持ち出し、適切に処分する。
・ 発生初期に、ストロビーフロアブル(F:11)等を散布する。

10 その他の病害虫

作物名	病害虫名	現況	発生予想	作物名	病害虫名	現況	発生予想
いちご	アブラムシ類	平年並	平年並	きく	ハダニ類	やや少	やや少

季節の病害虫防除対策

○イネ縞葉枯ウイルスを媒介するヒメトビウンカの状況（11月）と対策

イネ縞葉枯ウイルスを媒介するヒメトビウンカの越冬世代成虫の保毒虫率は県平均で5.0%と平年並、水田畦畔等における生息密度は、県平均で3.9頭と平年より少ない状況でした。一方で、県北部及び中部では、保毒虫率が上昇傾向にあり、要防除水準の10%を超える地点も認められています。次作においても、引き続き、イネ縞葉枯病対策を徹底しましょう。

○トマト・なす等 トマトキバガ

今年度、栃木県内で初めてトマトキバガのフェロモントラップへの誘殺が確認されました（[令和6（2024）年度病虫害発生予察特殊報第1号](#)）。また、本県のトマトで被害が確認されたので、ほ場内をよく観察し、疑わしい虫や被害を見つけた場合には、適切に薬剤防除を行いましょう。

○果樹類病害の冬期防除

整枝・せん定作業時には、罹病枝を取り除くか被害部を削り取り、切口にゆ合剤を塗布しましょう。また、落葉は様々な病害の伝染源となるため、適切に処分しましょう。

農薬の安全使用等

○「栃木県農薬危害防止運動」実施中（令和6年11月から令和7年1月）です。農薬は適正に管理しましょう。また、農薬を使用する際には、容器のラベルに記載された内容を遵守し、農薬による事故等の発生を防止しましょう。

○薬剤散布の後には必ず作業内容を記録し、防除履歴を作成しましょう。

○薬剤で防除する際には、RACコードの異なる薬剤をローテーション散布しましょう。

○花粉媒介昆虫のミツバチ、マルハナバチや天敵に対する影響日数に注意して薬剤を選択しましょう。

1か月気象予報（予報期間12月21日から1月20日 12月19日 気象庁発表）

- ・向こう1か月の気温は、寒気の影響を受けやすいため、低いでしょう。
- ・低気圧の影響を受けにくいため、向こう1か月の降水量は少なく、日照時間は多いでしょう。

向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（％）

項目	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気温	50	40	10
降水量	50	30	20
日照時間	20	30	50

詳しくは農業総合研究センター 環境技術指導部 防除課（TEL 028-665-1244）までお問合せください。

病虫害情報発表のお知らせはX（旧ツイッター）「栃木県農政部(@tochigi_nousei)」、農業総合研究センターホームページ（<https://www.pref.tochigi.lg.jp/g59/index.html>）でもご覧になれます



～栃木県からのお知らせです～

11月～1月は、「栃木県農薬危害防止運動」の実施期間です。



- ・安全作業の第一歩！ 農薬散布時の身支度は万全に！
- ・いつものチェック！ 農薬使用の際は、ラベルをよく読み正しく使いましょう！
- ・農薬散布のその前に！ 風量や風向きに注意して、飛散防止に努めましょう！
- ・周辺への配慮！ 住宅地等でやむを得ず農薬を使用する際は十分に配慮しましょう！
- ・農薬散布のその後に！ 防除器具の洗浄も必ず行いましょう！